

林政 ニュース

RINSEI NEWS

隔週水曜日発行

平成6年6月9日 第三種郵便物認可



森と木と人のつながりを考える

(株)日本林業調査会

発行所 〒160-0004 東京都新宿区四谷2丁目8番地
岡本ビル405

TEL (03)6457-8381

FAX (03)6457-8382

取引銀行 三井住友銀行飯田橋支店(普) 810522

郵便振替 00160-8-98120

発行人 辻 潔

定価 年間15,000円(1部625円、消費税別) (禁無断転載)

再生紙を使っています。

インターネット・ホームページ <http://www.j-fic.com/>

平成23(2011)年10月12日(水)

第422号

■ ニュース・フラッシュ ————— 3

- 来年度林野庁予算要求は2.3%増の2,782億円
- 林縁から20mの範囲で落ち葉除去、除染目安
- 林野庁人事解説 森林総研の理事などが交代
- グリーン賞に西村氏、国際森林年賞に藤村氏

■ 緑風対談 ————— 7

来年度林野庁予算概算要求がまとまる
やはりカギは「加速化基金」の延長

■ 遠藤日雄のルポ&対論 ————— 10

複合フローア-用単板でNo.1・空知単板工業(上)

■ 森林・林業再生へのニューウェーブ② ————— 14

木の学校をつくる「回路」をつなぎ直す・WASS

■ 地方のトピックニュース ————— 17

道産トドマツ精油で「クリアフォレスト」事業
林地残材から混焼用燃料、佐伯市で新工場稼働
十津川村と野迫川村に奈良県産材仮設住宅建設
仮設の仏壇で震災被災地を支援一田中静木材店

■ シンポから「広葉樹ルネサンス」は可能か? — 21



国土緑化推進機構は10月1日に東京都八王子市で、国際森林年記念「高尾の森・ふれあいと学びのキャンペーン」のキックオフイベントを開催した。歌手の上田正樹さんが東日本大震災復興事業応援ソング「今ある気持ち」(第419号参照)などを歌った。



「国際森林年」記念企画
森林・林業再生へのニューウェーブ②

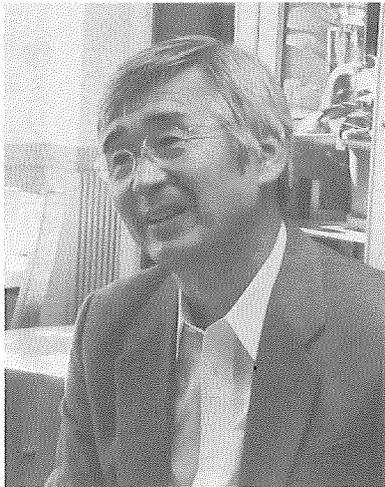
木の学校をつくる「回路」をつなぎ直す・東洋大学WASS

「共生学の構築」をテーマに掲げている東洋大学に、学校の木造化を推進する研究拠点がある。その名は、「木と建築で創造する共生社会研究センター（Wood & Architecture for Symbiosis Society Creation Research Center：略称WASS）」。同大学の教員がコアメンバーとなって5年前に発足し、木の学校づくりを中心にした多様なつながりを築き始めている。

「冬の時代」を超えて、「失われた30年」を取り戻す

WASSのセンター長をつとめている長澤悟・東洋大学教授（理工学部建築学科）は、30余年にわたって学校建築にかかわり続けてきた。そして今、「木造校舎を建築するシステムをつくり直さなければならぬ」と危機感を深めている。戦後、急速に進んだ都市化の中で、建築物には「不燃化」が強く求められ、木造は「冬の時代」を迎えた。昭和34年に行われた日本建築学会の総会で建築防災に関する決議が採択され、木造禁止の方針が打ち出された。昭和30年代から50年代後半まで、大型建築物はRC造が主流となって木造校舎は姿を消した。長澤教授曰く、「失われた30年」となってしまった。

ようやく風向きが変わったのは、昭和60年度。文部省（現文部科学省）が学校施設における木材使用量に応じて補助単価を加算する措置を講じた。以降、木造校舎の割合が徐々に増え、昭和59年当時のほぼゼロから現在は1割程度にまで上昇。最近では、内装や小屋



長澤悟・木と建築で創造する共生社会研究センター長

組み、家具などに木を使わない学校は、むしろ珍しくなった。

ただし、単に木材使用量が増えるだけでは、「失われた30年」を取り戻したことにほならない。例えば、メンテナンスの問題がある。

絶えず維持修繕できる仕組みを、先進事例を調査

「法隆寺にしても、痛んだところを取り替えることで長持ちしてい

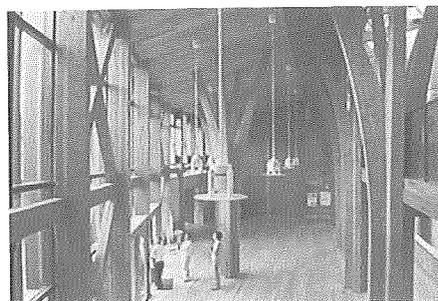


「国際森林年」記念企画
森林・林業再生②
へのニューウェーブ

2011・国際森林年

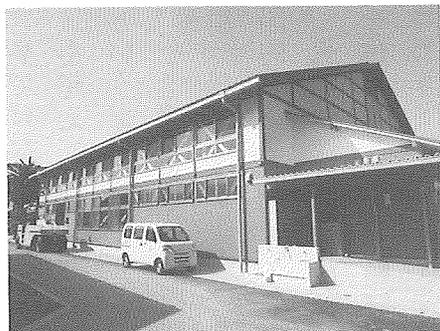
木の学校をつくる「回路」をつなぎ直す・東洋大学WASS

る。絶えず維持修繕をする仕組みが地域にないと、木造建築物は存立し得ない」——長澤教授は、こう指摘する。建物を壊して新築するのではなく、手を入れることで住み続け・使い続けることができる。そのためには、「設計者をはじめとした関係者が近くにいることが重要」。長澤教授は、「かわり」とつながり」というキーワードを何度も口にしている。



川上村の川上中学校

では、地域ぐるみで支える「木の学校づくり」とは、具体的にどのようなものか。すでに、WASSが行ってきた調査から、参考となる事例が明確になってきている。
秋田県能代市：十数年前から改築・新築の学校をRC造から木造に転換。設計者の工夫と市内の企業の協力で、建設費用をRC造並みかそれ以下にし、若い大工への技能の伝承も進めている。



中津市で昨年3月に竣工した伝統工法による純和風の鶴居小学校体育館

造校舎や体育館などを建設している。
埼玉県ときがわ町：耐震補強に合わせて、RC造校舎の木質内装化を実施。木質化をした後は、生徒や教職員のストレスが低下するなど教育環境が改善されることが明らかになってきている。
山梨県道志村、神奈川県横浜市：里山再生事業を行っている道志村と、横浜市の設計者・工務店らが組織した研究会が連携して学校の木質化を推進。部材発注の最適方法をシミュレーションしており、都市と山をむすぶモデルケースとなっている。

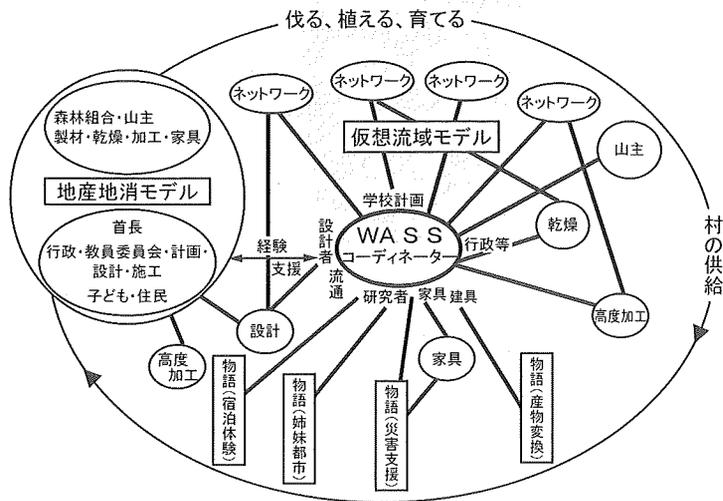
栃木県茂木町、長野県川上村、福井県南越前町：いずれも町（村）有林を積極的に活用して木造校舎を建設。茂木町と南越前町ではスギ・ヒノキ、川上村ではカラマツを使用。戦後造林木の有効活用を目指している。
大分県中津市：「木造校舎等研究会」を立ち上げ、設計者・工務店・企業などが手弁当で参加。伝統工法による木



「国際森林年」記念企画
森林・林業再生へのニューウェーブ

木の学校をつくる「回路」をつなぎ直す・東洋大学WASS

WASS が提案している仮想流域モデルのイメージ図



「地域材」という限定を超え「仮想流域モデル」を提案

WASSでは、現地調査や講演会・シンポジウム、定期的な研究会などを通じて、「木の学校づくり」に関する望ましいモデルを研究し続けている。そして浮かび上がってきた問題として、「地域材」という限定が引き起こす制約や閉鎖性がある。

「地材地建」で学校校舎を建築することが理想であることは誰もが認める。だが、実際に大量の木材を限られた期間で調達することは容易ではない。また、各地が「地域材」にこだわることによって、地域を超えて「地域材」が動けない（他の地域で使ってもらえない）というジレンマも生じている。

そこでWASSが提案しているのが、図に示した「仮想流域モデル」だ。地域と地域、人と人を「木」を媒介にしてつなぎ直し、全国的なネットワークを形成することが構想されている。

長澤教授は、「地域材」を使うには「物語性」が必要であり、物語を生み出せる「回路」をつくりたいと常々話している。つくったら終わりという木造校舎ではなく、関係者がかかわり続けられるような「木の学校」が各地にできれば、林業再生や地域活性化にも寄与できる。

「子ども達は未来への希望であり、学校には皆さん関心が高い。木の学校をつくる仕組みができれば、どんな建築物で建てられる」（長澤教授）。木造建築物を建設することが目的化するのではなく、建てる前からのプロセスと、建てた後のネットワークに着目しているところに、WASSの先見性がある。